
【三題噺】戦争ゲーム

うるる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【三題噺】戦争ゲーム

【Nコード】

N1114W

【作者名】

うるる

【あらすじ】

「文学少女」シリーズより三題噺

お題は【鳥】 【平和】 【戦争】

魔法学校で繰り広げる「戦争ゲーム」についてのお話

お題【鳥】 【平和】 【戦争】

「今日は…鳥が5羽。」

“彼”は空を眺めながら、そう呟く。空を見ると確かに鳥が飛んでいるのは分かる。しかし、どこを基準にして彼は「5羽」と言っているのだろうか分からない。しかも彼の発言はこれだけに留まらず、いつもぼそりと鳥の数を確認しているのだ。3羽、1羽、5羽…しかも決まって「戦争ゲーム」を行ってる最中に言うものであるから、クラスメイトたちにも彼のこの発言には戸惑うのだった。

さて…現在この魔法学校で流行っているのがこの「戦争ゲーム」である。その名の通り、クラス通しが簡易的であるが戦争を行うゲームである。

まず、戦争ゲームはいきなり行うことは出来ないのが基本的なルールである。闇討ちなども基本的に禁止事項だ。最初にクラスの長同士が契約を結ぶ事によって戦争を始める事ができるのだ。契約が結ばれた後に戦争は開始される。各自が習いたての魔法で戦うゲームである。

勿論学校という中では魔力や使える魔法というのはある程度制限されているので、使える魔法や魔力には限界がある。その中で如何にしてクラスの長を倒すのがこの戦争ゲームのポイントになってくる。クラスの長がやられてしまえば、何人生き残ろうがそこでゲームは終了だ。長を倒したクラスが勝利となる。

しかし最近この「戦争ゲーム」を覆すような出来事が発生している。

ある日、長同士の契約によってまた「戦争ゲーム」が始まったのだが、そのゲームは突然の長の戦闘不能によりゲームが終了するとい

う自体が発生した。

一体何が原因か？明らかに倒れた長のいるクラスの方が有利だったハズなのに、どうして長が倒れたのか。

長だけ毒の魔法にでも掛けられたのではないかという説が浮かび上がった。しかし学校で使える毒の魔法として、一撃必殺で倒れる魔法は存在しない。じわじわと毒によるダメージで倒れる事はあるが、毒の魔法を食らってすぐに倒れるということは有り得ないのだ。

長にいた側近がもう片方のクラスのスパイだったのではないか？いや、それも考えにくい。変装魔法というのは上級魔法の一種で魔法学校の生徒がそう簡単に使えるとは考えにくいのだ。その他にも色々な説が考えられたが、長が「倒れる前に爆発のようなものがした」という証言から一致できる理論が存在しなかった。

更にそのクラスは別のクラスとの「戦争ゲーム」でも同じ結果が表れた。それを見込んで上級生のクラスも挑んできたが、結果は同じだった。何年も魔法能力に長けている上級生でもこの謎が解けなかった。

そして―勝ち続けているクラスでさえも、何故自分のクラスはこのようにして勝ち続けているのかが分からなかった。

誰もが謎に思うこの不気味な現象に、このクラスは遂に他のクラスから戦争ゲームを申し込まれなくなった。

後日、クラスの長がクラス全員にこの事を伝え、一体誰がこのような事をやっているのかを聞いてみたのだが、誰も何も言わなかった。分からないだけなのか、隠しているだけなのか。クラス全体も混乱しているようであった。

そこでクラスの長は最も気になるクラスメイトを一人呼び出した。―そう、戦争ゲームの最中に鳥の数を暢気に数えていた“彼”だ。他のクラスメイトは戦争ゲームに参加しているのに、彼だけは空を見て、鳥の数を数えているだけだった。参加していないだけならまだしも、何故戦争ゲームの時だけ、彼は鳥の数を数えているのだろ

うか。

「戦争ゲーム以外の時にも鳥を数えているのか？」

「うーん、あまり。」

そう彼は答えた。

「何故戦争ゲームの時だけは決まって鳥の数を数えるんだ？」

「そう回り込んだ聞き方をするなって。僕が謎の爆発の犯人だと思っているんでしょ？」

変化球でも使って彼に訊こうと思ったのだが、あっさりストレートで返されてしまった。ならば仕方ない。こちらもストレートで返すしかない。

「そうだよ。一体君はどんなトリックを使っているのかい？」

「これだよ。」

と言いながら見せてきたのが、小さな折鶴だった。どうやら彼のノートの切れ端でこの鶴を折っているのだよ。手のひらの真ん中でちよこんと乗っている。よくこんな小さな鶴を折れるものだど軽く感心したが、本題はそこではなかった。

「これが君の言っていた“鳥”なのかい？」

「そうだよ。相手の長と側近を含めた数を情報を聞いて確認する。そして浮遊能力を備えたこの鶴を窓から飛ばして、後は色んなところから進入させた鶴を首元で爆発させる。そうすると人は勝手に気絶してくれるんだ。」

つまり「5羽」というのは長と側近の合計数。確かに：その時の戦争ゲームは側近と長5人が謎の爆発によって倒れていた。つまり彼の理論は正しいということが言えるのか。

「このぐらいの大きさならほとんどバレずに相手の傍まで寄せることが出来るんですよ。まあどうしてもって場合はこの大きさなら少しの間だけ透明にさせることも出来ないことはない。」

なんだコイツ：魔法の天才か。いや、それは重々承知している。彼はいつもクラス、いや学年でトップクラスを誇る魔法の使い手であることは認めている。しかしまさかここまでやってしまうとは驚き

であった。他のクラスメイトは正々堂々と正面から突っ込んで戦っているのに、彼だけ完全に頭脳派の戦闘であった。同じ魔法学校の学生なのに、この差はなんなのかと、長は一瞬寒気すら覚えたのだった。

「どうして君はそのような倒し方を考えたのかい…？」

ここで彼は少し考え事をしているかのように顔を少し曇らせ、やがて溜め息を少し吐き、話し始めた。

「“戦争”なんていいもんじゃないよ。人が感情も抱かずに“ゲーム”のように人を殺していく。でも戦争をやめろと言っても、人は人それぞれの意見があるから決して戦争は終わることは無い。僕は出来る限り無駄な戦争をしたくないね。傲慢だけど自分のいる世界は自分の力で平和にしたいよね。だから僕は最善の方法でこの下らない戦争を終わらせた。結果誰も僕のクラスに戦争を頼み込もうと思う輩がいなくなった。これが僕の考える理想的な“平和”だと思うよ。」

彼はノートをちぎり、器用に鶴を折る。鶴の折り方は勿論知っていたが彼の手元でそのように折られているかどうかは見えなかった。そのぐらい細かく折り込まれていた。そして見事完成した鶴を彼は紙飛行機を飛ばすかのように、ゆっくりと飛ばした。すると鶴は宙に浮き、ふわふわと教室を飛び始めた。確かに教室の背景と折られた鶴は同化していて見えにくかった。

そして鶴を飛ばす彼の顔には少しだけ笑顔が存在していた。普段決して見せることのない笑顔が、そこにはあった。平和を願う彼の笑顔がそこにはあったのだ。長はこれ以上彼には何も尋ねることはなかった。

それからやはりそのクラスには戦争ゲームの申し込みは来なかったものの、クラスは平和に魔法学校の日々を過ごしたのだった。それが彼の願った平和だったのかどうかは別として。

「今日は…鳥が3羽。」

そう言いながら彼はまた人知れぬところで黙々と鶴を折り、平和を
願ひ、飛ばしているのかもしれない。

（後書き）

花火の後でかるーく頭が痛いうるです。

三題噺らしく短時間でぱっと仕上げた作品です。

友人からのお題【鳥】 【平和】 【戦争】 だったのですが、結構単純なお話を書けるフラグでしたよね。

戦争と平和は常に対立関係なので書きやすいし、鳥なんかも鳩にすれば平和の象徴だし、とか。

まあやはりこの三題噺は【鳥】がポイントになりますよね。どの鳥をどのように扱うかですね。

お話は私の中で最近ブームのこの魔法の世界にしておきまして、魔法学校の中のワンシーンをお話にしました。

何せちよちよいと考えたので、浅はかな考え方が多いかもしれません。

でも、ちょっと面白くなれるような作品に仕上がっていればなと願っています。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1114w/>

【三題噺】戦争ゲーム

2011年10月4日22時17分発行